

東京音楽大学リポジトリ

Tokyo College of Music Repository

アンダルシアにおけるアラブ音楽に関するノート(II)
: 大音楽家ジルヤーブとその時代

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: ja 出版者: 公開日: 1983-01-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属: |
| URL | https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/658 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



アンダルシアにおけるアラブ音楽に関するノート(Ⅱ)

—大音楽家ジルヤーブとその時代—

木 島 健 一

はじめに

I. 東方アラブ世界にて

1. 修業時代のジルヤーブ
2. アッバース朝初期の音楽家
 - a. 音楽家と社会環境
 - b. 音楽家の養成

II. 西方アラブ世界にて

1. 「東方の文化人」ジルヤーブ
2. 大音楽家ジルヤーブ

おわりに

はじめに

ジルヤーブ *Ziryāb* とは、西暦9世紀の前半にアンダルシア(注1)で活躍したアラブの大音楽家の名前である。彼はアンダルシアにおける最も著名な音楽家として知られたが、現在のチュニジア、アルジェリア、モロッコ等の北アフリカ諸国の古典音楽(アンダルス音楽 *al-musīqā al-Andalusīya* と称される)とも結び付けられて、彼の名は今なお人口に膾炙している。当時(8世紀後半～9世紀前半)のアラブ世界は、東方のアッバース朝(750～1258年)を中心に展開していたが、一方ではアッバース朝から自立した地方政権も誕生していた。西方アラブ世界における、チュニジアのアグラブ朝(800～909年)やイベリア半島の後ウマイヤ朝(756～1031年)はその代表的な例である。ジルヤーブは最初アッバース朝支配下の東方アラブ世界で修業を積んだが、その後西方アラブ世界に渡った。そしてアグラブ朝を経て、アンダルシアの後ウマイヤ朝の宮廷で活躍し、その後のアンダルシアの音楽文化に決定的とも言える程の影響を与えた。彼は特に音楽の分野において傑出していたが、それだけに止らず、広く文化人としても活躍し、東西アラブ世界を結ぶ巨大な懸け橋となった。本稿では、この文化人の音楽の分野における活動を軸とし、併せて、この時代の音楽家が置かれていた社会的な環境を彼を中心として描いてみた。

なお、全体の構成を大きく2つに分け、前半でジルヤーブの修業時代を、後半で彼の大成の時代を扱うが、それに東西アラブ世界の地理的、文化的情況をオーバーラップさせて記述するように試みた。

I. 東方アラブ世界にて

1. 修業時代のジルヤーブ

ジルヤーブ *Ziryāb* とは通称である。本名はアブー・アルハサン・アリー・ブン・ナーフィー *Abū al-Ḥasan ‘Alī b. Nāfi’* と言う。ジルヤーブとは「黒鳥」を意味するが、(注2) そのように呼ばれたのは、「彼の黒い膚色に加え、その雄弁な話しぶり」と洗練された人となりのため」(注3) である。また、彼がアグラブ朝の宮廷に仕えていた時に、自らの黒さを誇った事が原因で追放された(注4) 事を考え併せると、ジルヤーブは黒人系であったと考えられる。しかしながら、彼はもともと奴隷であった事もあって、生年をはじめ若い頃の事はよく分っていない。ともあれ、ジルヤーブはアッバース朝第3代カリフのマフディー *al-Mahdī* (在位775~85年) によって奴隷の身分から解放され、(注5) アッバース朝の当時の都バグダードで音楽の修業を積んだ。

ジルヤーブの音楽上の師として挙げられているのは、資料によって異なるが、(注6) イブラーヒーム・アルマウシリー *Ibrāhīm al-Mawṣilī* (742~804年) とその息子のイスハーク・アルマウシリー *Ishāq al-Mawṣilī* (767~850年) である。恐らくは、イブラーヒームが最初の師であり、その後でイスハークから学んだのであろう。ところで、マウシリー父子は2人共当時を代表する大音楽家であった。ジルヤーブが彼等を師に持った事は、ジルヤーブ個人にとってだけでなく、アンダルシアにおけるアラブ音楽の性格にとっても重大な意味を持つが、それにはマウシリー父子の音楽上の立場を知らねばならない。そこで当時のアラブ音楽における潮流を概観した場合、最も特徴的なのは、宮廷音楽家を中心として2つのグループが対立していた事であろう。ここではこのグループを、仮に「伝統派」と「革新派」と呼んでおく。ちなみに「伝統派」は、あくまでもヒジャーズ地方(メッカ、メディナを擁するアラビア半島の西部地域)の古くからの伝統に従い、あらゆる個人的な恣意をできる限り排除するよう主張していた。これに対しイブラーヒーム・ブン・アルマフディー *Ibrāhīm b. al-Mahdī* (779~839年) とイブン・ジャーミー *Ibn Jāmi’* に率いられた「革新派」は、「伝統派」の態度を余りにも形式にこだわりすぎ形骸化したものと非難し、ペルシア系を中心とした新しい傾向を採り入れるよう真っ向から反論を加えた。しかし、この対立は以上のような音楽理論上の事だけではなかった。宮廷内の勢力争いは常であり、師弟関係を始めとする様々な人間関係のもつれも加わって、それがまた理論上の対立を増幅したのである。そして「伝統派」を代表したのが、ジルヤーブの師であるマウシリー父子であった。この事から、ジルヤーブはその音楽上の基本的立場を「伝統派」に拠ったと思われる。そして、アンダルシアのアラブ音楽においてジルヤーブ

が占める位置の大きさを考える時、その事の意味は非常に大きいと言えよう。

しかしながら一方では、ジルヤーブは徐々に自らの独自の立場をも主張するようになる。この事は、イスハーク・アルマウシリーがアッバース朝第5代カリフのハールーン・アッラシード Hārūn al-Rashīd（在位786～809年）に自分の高弟としてジルヤーブを紹介した時に一気に表面化し、ジルヤーブは「師イスハークのウードではなく、自ら制作したウードを使う」事にあくまでも固執してしまったのである。（注7）そして、ハールーンがイスハークのウードとの違いを尋ねた時、ジルヤーブは両者の外観は同じだが音自体が全く異なる事を強調した。そしてその理由を、相方のウードが重さにおいて約3分の1ほど異なっている事と、自らのウードに張られた弦の優秀さに求めている。さらに続けてジルヤーブは、自分の弦は絹と若いライオンの腸からできているが、絹の紡ぎ方は特別であり、またライオンの弦は強さ、音の深み、音の明晰さの点で他の動物のものよりも勝れており、耐久性もよく気温の変化にも強い、と主張したのである。（注8）以上のエピソード自体はフィクションかも知れぬが、その意味する所は真実に迫っていると思われる。ここで示されているのは、単にジルヤーブとイスハークのウードの相違だけではない。両者の音楽性の違いをも示しているのは明らかである。

ともあれ、ジルヤーブはカリフ、ラシードの注目を引くのに成功した。イスハークは、将来自らの地位を脅かすかもしれないこの弟子に対し恐怖と憎悪の念を抱き、（注9）ジルヤーブとイスハークの対立は極限にまで達した。その結果、ジルヤーブは師イスハークの圧倒的な権勢の前に抗す術はなく、バグダードを追われたのである。（注10）そして、イスハークによるジルヤーブの東方アラブ世界からの追放は徹底的であり、ある意味ではほぼ完全であったと言う事ができる。何故なら、この時代だけでなく9世紀以前の東方のアラブ音楽にとっての最大の典拠である、イスバハーニー al-Iṣbahānī（897～967年）の『歌の書』Kitāb al-aghānī にジルヤーブについての記述が全く見られないからである。この事は、イスバハーニーが『歌の書』の主要な拠り所をイスハークの諸著作に求めた事だけでは説明がつかない。しかしながら、ジルヤーブの没後、約半世紀の後に生まれたイスバハーニーが、この高名な音楽家の名前を知らなかったと考えるのは不自然である。また、たとえジルヤーブにとって東方での時期が基本的には修業時代であったという事を考慮したとしても、このエピソードの頃のジルヤーブは既に十分な実力を備えた音楽家だったのであり、『歌の書』の記述の対象にならないとは思えない。結局の所、イスバハーニーは音楽上の立場がイスハークにごく近かったため、『歌の書』からジルヤーブを故意に除外したと考えるのが最も妥当ではないかと思われる。こうして、ジルヤーブは東方を去ったが、その時期はカリフ、ラシードの治世の後半から末にかけての8世紀末か9世紀のごく初めであった。

2. アッバース朝初期の音楽家

8世紀後半から9世紀前半における音楽文化の盛況ぶりは、イスバハーニーの『歌の書』や、より一般的には『千夜一夜物語』Alf layla wa laylaの中に余す所なく描かれている。こ

の節ではジルヤーブを含め、この時代の音楽家が社会的にどのような環境に置かれたのかを、東方のアッバース朝の宮廷を中心に述べる。

a. 音楽家と社会環境

この時代に、音楽に携わる人々には奴隷だけでなく自由人もいた。しかし一般的には、音楽自体が好ましいものとは決して考えられていなかったため、たとえ音楽家の存在がやむを得ないものであれ、それに相応しいのは社会の下層の人々、例えば奴隷や解放奴隷であると見なされていた。宮廷にあっても、音楽に従事した人々の大多数は奴隷身分の、それも女性達であった。しかしながら、たとえ奴隷等の下層民の出身であっても、^{タイカ}大家の地位にまで昇りつめた者も決して少なくなかった。ジルヤーブもその代表的な一人と言えようが、歌の素晴らしさでその名を謳われたムハーリク Mukhāriq (845年頃没)の場合もそうである。彼は高名な女性音楽家アーティカ・ビント・シュフダ 'Ātika bint Shuhda の奴隷であったが、アーティカやイブラーヒーム・アルマウシリーについて音楽を学び、カリフ、ハールーン・アッラシードによって奴隷の身分より解放された人物である。また、その歌と共に、波乱に満ちた生涯でも有名なウライブ 'Urayb も奴隷出身であった。彼女の歌の秀逸さは、アッバース朝第15代カリフのムータミド al-Mu'tamid (在位870~92年)がそのコレクションを作るように命じた程であった。シャーリヤ Shāriya もまた、当時の代表的な女性音楽家の一人である。生れの良さにもかかわらず奴隷に身を落としたが、「革新派」の指導者イブラーヒーム・ブン・アルマフディーに買われ音楽家としての教育を受けた。そして後には、イブラーヒームによって解放されて彼の妻となり、その声望を欲しいままにしたのである。

一方、名門のアラブに属するような人々の中にさえも音楽の分野で活躍する人物が現われた。例えば、「革新派」の代表的人物の1人であるイブン・ジャーミーは、預言者ムハンマドと同じクライシュ族に属し、その中でも名門とされるサフム家の出であった。また“アラブの哲学者”として有名なキンディー al-Kindī (801年頃~66年頃)は、主に理論面で音楽に貢献したが、彼もまた由緒正しいアラブであった。カリフでさえも音楽に親しみ、アッバース朝第9代カリフのワーシク al-Wāthiq (在位842~47年)や、時代は少し下るが同じく第15代カリフのムータミドは、職業音楽家にも負けない程の音楽的素養を積んだのである。しかし何と言っても、音楽家としてその影響力の大きさを誇ったのは、「革新派」のリーダー格と仰がれたイブラーヒーム・ブン・アルマフディーであった。彼はアッバース朝カリフのマフディーの息子で、ハールーン・アッラシードにとっては異母弟であった。イブラーヒームは、歌姫の出であった母親の影響を強く受けて幼い頃から音楽に親しみ、若い頃から音楽家として名を成した。しかし運命のいたずらから政治の表舞台に引き出された彼は、時の第7代カリフ、マームーン al-Ma'mūn (在位813~33年)と争い、817年にはカリフを称したのである(カリフ名ムバーラク al-Mubārak)。しかしマームーンの力の前には抗すべくもなく、かろうじて命だけは助けられた(注11)イブラーヒームは、残りの人生を専ら音楽家として送り「革新派」をリードしたのである。

^{クイカ} 大家の多くは宮廷に出入りを許され、その中でも一部の者はカリフのナディーム nadim (宴席での相伴役) として特別な地位を得ていた。マウシリー父子やムハーリクもこの愛顧を受けたが、イブラーヒーム・アルマウシリーの通称となったナディームはここに由来している。ジルヤーブもまた、アンダルシアでナディームとなった事が伝えられている。(注12) しかし、高名な宮廷音楽家と言えども明日の運命は知れなかった。カリフを始めパトロンの気分は、非常に変わりやすかったからである。多くの者が鞭と牢を体験したが、後述するように、この点ではジルヤーブも例外ではなかった。イブン・ジャーミーとイブラーヒーム・アルマウシリーも、その命に反したかどで、カリフ、マフディーにより罰せられた。ただしマウシリーの方が手ひどく鞭打たれたのに反し、イブン・ジャーミーは自らの血筋の良さのお陰でバグダードから追放されただけであった。(注13) また、有名な中立3度の導入や新しいウードの開発で、アラブ音楽史上に重要な位置を占めるザルザル Zalzal (791年没) も、カリフ、ラシードの怒りを買って、その晩年を長い間牢の中で過ごさなければならなかったのである。

b. 音楽家の養成

当時の音楽家が受けた教育あるいは訓練は多様である。イスハーク・アルマウシリーは幼少の頃から英才教育を受けたが、それは音楽の分野だけに限られなかった。彼は一流の学者達からコーラン(イスラムの聖典)、ハディース(預言者ムハンマドの言行に関する伝承)、法学等について教えを受けたが、それらは当時の教養人、文化人にとって必須の学問であった。実際、彼は殊に音楽家としてその名を知られていたが、その他の分野でも多くの著作を物している。音楽に関しては、父のイブラーヒーム、ザルザル、アーティカ・ビント・シュフダが彼の主な師であった。またジルヤーブについては、ムハーリクの場合と同じく、職業音楽家になるべくして幼い頃から教育されたと言えよう。そしてその過程で、音楽とそれに関連した諸々の知識や技術の他に、後に彼がアンダルシアの宮廷で示した諸々の文化的素養を身につけた事と思われる。

音楽家の中でも数的に最も多い歌姫の養成については、^{クイカ} 大家が設けている音楽学校(道場)でなされる場合が非常に多く、奴隷身分の女性が、歌姫候補生として音楽学校の生徒の大多数を占めていたと思われる。ウマイヤ朝期(661~750年)のジャミーラ Jamila (720年頃没)も自らの音楽学校に多数の女奴隷を預って歌姫を養成していたが、この時代ではイブラーヒーム・アルマウシリーの経営する音楽学校が広く知られていた。イブラーヒームのこの音楽学校は、直接、間接にジルヤーブがアンダルシアで設けた音楽学校に影響を与えたと思われ非常に重要であるが、その具体的な教育方法についてはよく分らない。当時の音楽界で指導的な立場にあったイブラーヒームは、多数の男女の奴隷を依託されて彼等を一人前の音楽家に仕上げ、莫大な養育費を得ていた。また、場合によっては自ら奴隷を所有して教育を施すこともあったが、いずれにせよ彼の弟子育成においてその音楽学校は大きな位置を占めていた。

しかし、音楽学校で学ぶ生徒が全て職業的な音楽家に結びつくわけではなかった。特に女奴隷の場合は、単に音楽の素養を身につけるためにそこへ預けられる場合も多かったと思われる

る。と言うのは、奴隸の様々な用途のうち「主人の楽しみのために存在する」奴隸の場合、美しさもさることながら、歌や踊りは詩や文学のたしなみ、洗練された物腰等と並んで彼女達の魅力を高めたからである。そして彼女達の取引は高値を呼び大きな利益につながった。(注14) しかし一般に、奴隸の側にとっても、技芸・教養を身につけることは望ましかったと言える。何故なら、それらの技芸・教養は、それが職業と結びつくにせよ結びつかないにせよ、自らの奴隸という身分を解き放ち、将来の幸運を切り拓く手掛かりともなったからである。事実、そのような例は枚挙に暇がなく、特に女奴隸の場合は自分の主人（所有者）との結婚という形で今までの身分から解放されるケースが非常に多かったのである。

以上のように、この時代の音楽教育は、個別的あるいは音楽学校の場合のように組織的に行われたが、その過程を通じて師から弟子へと技術・流儀が伝えられていった。そして音楽学校にあっては、音楽を中心として特に女奴隸の教育に果たした役割が強調されなければならないと思われる。何故なら、たとえ社会的に望ましいものでなかったにせよ、女性にとって音楽は職業として許された数少ない分野の一つであったからである。

II. 西方アラブ世界にて

東方アラブ世界を追われたジルヤーブは西方アラブ世界にその活躍の場を求めたが、彼が深く関ったのはチュニジアのアグラブ朝とアンダルシアの後ウマイヤ朝の宮廷であった。ここでは、東西のアラブ世界を念頭に置きながら、アンダルシアにおけるジルヤーブの存在基盤を、彼が「東方の文化人」である事に求め、その発展上に音楽家としての存在を考えてみた。

1. 「東方の文化人」ジルヤーブ

ジルヤーブは師のイスハーク・アルマウシリーの圧力の前にやむなくバグダードを去ったが、その後最終的にアンダルシアに至るまでの期間（少なくとも10年間以上、恐らくは約20年間）についての詳細は不明である。しかしその大部分は北アフリカで過ごしたものと思われ、影響の程は分らないものの、その地で相当の名声を獲得したようである。(注15) そしてアンダルシアに至る直前には、チュニジアのカイラワーンにおいて、アグラブ朝の支配者ジャーダ・アッラーフ 1世 *Ziyāda Allāh I*（在位817～38年）の宮廷に仕えていた。しかし、イスラム以前のジャーヒリーヤ時代の大詩人アンタラ・ブン・シャッダード *'Antara b. Shaddād*（彼の母は黒人奴隸であった）の詩を歌った際、ジルヤーブは自らの色の黒さを誇ってしまった。ジャーダ・アッラーフ I 世は、その事を非常な無礼と見なして激しく怒り、ジルヤーブを鞭打ったのち追放してしまったのである。(注16) そして、ジルヤーブがジブラルタル海峡を渡ってアンダルシアに上陸したのは822年のことであろう。もともとは後ウマイヤ朝のアミール、ハカム I 世 *al-Ḥakam I*（在位796～822年）に自らを売り込んだのであるが、ハカム I 世の突然の死によって、その後継者のアブド・アッラフマーン 2世 *'Abd al-Raḥmān II*（在位822～52年）に任える事になった。(注17)

アブド・アッラフマーン2世の、ジルヤーブに対する歓迎ぶりやその後の待遇は破格であった。(注18) もちろんジルヤーブの個人的資質がその理由の大半を占めようが、そこにアンダルシアの人々が東方に対して抱く憧憬、さらにはコンプレックスを見い出すことも可能であろう。事実、東方アラブ世界に比べて当時のアンダルシアの力は比べものにならず、その格差は政治経済上だけでなく、文化上においても大きかったのである。また、たとえ後ウマイヤ朝とアッバース朝の政治的対立が小さくなくとも、アラブ世界の辺境に過ぎないアンダルシアの人々には、アラブ世界の中心の東方に対する強い憧れがあった。従って、ジルヤーブのアンダルシアにおける存在基盤はこの点に見い出せよう。彼が期待された役割は、「東方の(音楽を中心とした)文化人」として「東方の香り」を伝える事であった。そして、ジルヤーブはその役割を十分に果たしたばかりか、様々な分野で自らのオリジナリティーをふんだんに注ぎ込んだのである。

ジルヤーブは音楽以外にも、詩や文学、また天文学や地理学に精通していたが、(注19) これらの知識は直接、間接に音楽家としての彼を支えていた。また音楽の分野と並んでジルヤーブの名を高めたのは、宮廷生活における洗練さの領域において彼が紹介したり工夫したりした流儀である。(注20) この分野でのジルヤーブの活躍は華々しく、例えば、髪型や料理法におけるジルヤーブの新しい試みは大いに歓迎され、また金や銀の代わりにクリスタルの食器を使用したり、季節に応じて衣替えをより適切に行うよう人々に勧めた。この領域における彼の貢献はこれ以外にも数多く伝えられているが、東方での知識、体験を土台にしたものが多いのは当然の事として、随所に自らの創意、工夫が活かされている。その中のあるものは、宮廷から庶民の生活にも根を下し、しばしば彼の名と結びつけられて広まった。(注21) このように、ジルヤーブはアブド・アッラフマーン2世の宮廷において洗練さの権威者であり、彼の立ち居振舞自体が宮廷における人々の行動、作法の手本となった程であった。(注22)

2. 大音楽家ジルヤーブ

「東方の文化人」として幅広い活躍をしたジルヤーブであったが、彼の才能が最も発揮されたのが音楽の分野であったのは言うまでもない。ジルヤーブは素晴らしい声の持主で、そのレパートリーは1万曲を数えた(注23)と言われる。またウードの優れた演奏者であり、音楽の関連分野にも深い知識を有していた。(注24) 彼の創意工夫の才は音楽の面においても遺憾なく発揮されたが、そのことは特にウードの改良や歌の教授法によく示されている。

東方においてジルヤーブが自ら制作したウードについては既に述べたが、彼はアンダルシアにおいても幾つか重要な改良を加えている。ジルヤーブはそれまでの4本の弦の中央に赤い第5弦を新たに加え、ウードの表現領域を拡げた。またこの事は同時に、(粘液質、血、胆汁、黒胆汁という)人体の4つの体液に対応する4本の弦に、魂を示す新たな弦を付け加えた事を意味した。(注25) またウードの撥に関して、ジルヤーブはそれまでの木製のものに代えてワシの羽軸から作られた撥を紹介したが、前よりも取扱いが容易で、弦にも無理がかからない利

点を有していた。(注26)

また、ジルヤーブは優れた教師で多くの弟子を育成したが、自ら確立した方法論に従って生徒達を訓練したと思われる。歌の初心者に対する教授法には彼の独創性がよく現われていて興味深い。ジルヤーブは歌の初心者に対し、一定の資質を備えた者だけを自分の弟子に加えた。彼が入門希望者に求めた資質は、力強い声と、声の明瞭さ、そして声の響きのよさ等であった。しかし、常に最初からそれらが全て得られるとは限らない。そこで彼は、時に改善のために次のような試みをした。例えば声が弱い場合には、声が口からスムーズに出やすいように、ターバンで腹を縛って発声させた。また口の開きが小さい時は、指3本分の幅の木片を絶えず口の中に入れてさせて矯正に努めた。しかしそれでもだめな場合には、それ以上の骨折りはなされなかった。(注27) またジルヤーブが初心者に歌を教える場合、ただ手本を実際に示すだけではなかった。彼は、カリキュラムに従って基礎から3つの段階を踏んで系統的に教えたが、それはアンダルシアにおける一般的な訓練法として定着した。(注28)

このように、教授法にも多くの工夫を凝らしながら、ジルヤーブは多数の弟子を育てた。彼等は個別に、あるいはジルヤーブの音楽学校を通じて訓練を受けたが、弟子達が、ジルヤーブの流儀を伝え、発展させて行く上で大きな力となったのは言うまでもない。ジルヤーブの弟子としては、まず彼の子供達が挙げられよう。ジルヤーブは10人の子供達(8人の息子と2人の娘)を持ったが、彼等はいずれも音楽家として知られた。(注29) またマサービーフ Maṣābīḥ とムトア Mut'a も優れた歌姫として師の名前を高めたが、(注30) フェドル Fadl とアラム 'Alam とカラム Qalam の3人もアンダルシアでジルヤーブの指導を受けたと考えられ、その弟子に加えてよいと思われる。最後の3人はアブド・アッラフマーン2世が東方から買い求めた歌姫達であったが、既にメディナで音楽の訓練を受けていた。フェドルは東方において、カリフ、ラシードの娘の1人に仕えた後、メディナで音楽の素養を積み、アラムと共にアンダルシアへ至った。(注31) 一方カラムは、もともとアンダルシアの出身であったが、幼い時に東方へ送られ、そこで多方面の素養を身につけた歌姫であった。(注32)

以上のように、ジルヤーブが「東方の文化人」としてアンダルシアにおいて果たした役割は非常に大きかったが、特に顕著なのが音楽文化の領域であった事は、今更繰り返す必要もあるまい。さて、音楽家としてのジルヤーブが果たした最大の貢献は、東方のアラブ音楽の成果をアンダルシアに紹介するとともに、アンダルシアにおけるアラブ音楽のその後の方向をある一定の枠組みの中に導いた事である。そして、彼の基本的な立場は、「アラブ音楽の伝統派」に拠ったが、彼はそれを核としながらも、楽器、教育を含む多くの面で、多大のオリジナリティーを加えたのである。こうして成立した彼の流儀は、自分の子供達を含む弟子達を通じアンダルシアに広まっていった。

おわりに

ジルヤーブがその波乱に富んだ人生の幕を閉じたのは、852年の事であった。(注33) それは

奇しくも、彼が仕えたアブド・アッラフマーン2世が没したのと同年代であり、彼がアンダルシアに渡ってから30年の後であった。ジルヤーブは音楽文化を中心としてアンダルシアの文化全般に大きな足跡を残したが、彼の影響はアンダルシアだけに止まらず、北アフリカにも及ぶ事になる。それを伝えたのは、キリスト教徒によるレコンキスタ（国土再征服）運動によってイベリア半島からその地に追われた人々であった。そして、彼等の手を経てジルヤーブの文化上の遺産も北アフリカにおいて受け継がれ、音楽上のそれは北アフリカ諸国の古典音楽として現在に至るまで生き続けてきたのである。（本学職員）

注

- (注1) 中世のイベリア半島において、イスラム教徒の支配下にあった地域を言う。「アルアンダルス」が正式な呼称であるが、本稿では一般に馴染深いアンダルシアを用いている。
- (注2) al-Maqqarī: Kitāb nafḥ al-ṭīb min ghuṣn al-Andalus al-raṭīb wa dhikr wazīrihā Lisān al-Dīn ibn al-Khaṭīb. Leiden, 1855~61, vol. 2, p. 83.
- (注3) 同書, vol. 2, p. 83.
- (注4) Ibn ‘Abd Rabbih: al-‘Iqd al-farīd, vol. 6. Cairo, 1949, p. 34.
- (注5) →注2, vol. 2, p. 83.
- (注6) al-Maqqarī (前掲書, vol. 2, p. 83) はイスハーク・アルマウシリーを, Ibn ‘Abd Rabbih (前掲書, vol. 6, p. 34) はイブラーヒーム・アルマウシリーを挙げている。
- (注7) →注2, vol. 2, p. 84.
- (注8) 同書, vol. 2, p. 84.
- (注9) 同書, vol. 2, pp. 84~5.
- (注10) 同書, vol. 2, p. 85.
- (注11) この間の経緯については『千夜一夜物語』でも扱われている。(平凡社の東洋文庫では、「アル・マハディーの子イブラーヒームの物語」と題されて、第273夜から275夜を占めている。)
- (注12) Ibn Khaldūn: al-Muqaddima, vol. 2. Beirūt, 1970, p. 361.
- (注13) al-Iṣbahānī: Kitāb al-aghānī, Cairo, vol. 5, 1932, p. 160. 同書, vol. 6, 1935, p. 303.
- (注14) 例えば、一人の奴隷仲買人は、ある奴隷の値段を問われて次の様に答えている。「市場の相場は金一万ディーナールとなっております。でございますが、この女の持主が誓って申しますには、一万ディーナールでは、この女が食べました鶏だとか、飲んだお酒だとか、着せてやった晴着だとか、それから教師たちへの謝礼金だとかが支払いきれぬようにございます。それと申しますのも、この娘は書道から文法学、言語学からコーランの釈義、法学の淵源から神学、医学や年代学などを修め、さらにはまた諸楽器の演奏にも通じているのでございます」(アラビアン・ナイト3, 平凡社, 昭和42年, p. 6)
- (注15) →注2, vol. 2, p. 85.
- (注16) →注4, vol. 6, p. 34.
- (注17) →注2, vol. 2, p. 85.

- (注18) アブド・アッラフマーン2世の宮廷においてジルヤーブの存在が大きくなるにつれ、彼に対する反発もまた強まった。その代表的な例として詩人ガザール al-Ghazāl の場合が挙げられよう。彼もアブド・アッラフマーン2世のお気に入りの1人であったが、ジルヤーブに対する妬みから彼を風刺詩で中傷した。しかし、この事件はアブド・アッラフマーン2世の怒りを招き、ガザールはアンダルシアから追放され、東方のイラクへと逃れた。(→注2, vol. 1, p. 633)
- (注19) →注2, vol. 2, p. 87.
- (注20) →同書, vol. 2, pp. 87~8.
- (注21) →同書, vol. 2, p. 88.
- (注22) →同書, vol. 2, p. 87.
- (注23) →同書, vol. 2, p. 87.
- (注24) →同書, vol. 2, p. 87.
- (注25) →同書, vol. 2, pp. 86~7.
- (注26) →同書, vol. 2, p. 87.
- (注27) →同書, vol. 2, pp. 88~9.
- (注28) →同書, vol. 2, p. 88.
- (注29) 彼等の名前は次の通りである。息子達は、アブド・アッラフマーン ‘Abd al-Raḥmān, ウバイド・アッラーフ ‘Ubayd Allāh, ヤフヤー Yahyā, ジャーフアル Ja’far, ムハンマド Muḥammad, カーシム Qāsim, アフマド Aḥmad, ハサン Ḥasan であり、娘達は、ウライヤ ‘Ulayya とハムドゥーナ Ḥamdūna である。(→注2, vol. 2, p. 89)
- (注30) →注2, vol. 2, p. 90.
- (注31) 同書, vol. 2, p. 96.
- (注32) 同書, vol. 2, pp. 96~7.
- (注33) Ibn Ḥayyān: al-Muqtabis. Beirut, 1973, p. 87.